七、品川と安藤広重

初代広重は、「東海道五十三次」（天保五年・一八三四作）の版画によって有名になり、やがて浮世絵の大家として名をとどろかせました。初代の広重と品川とは、品川宿が東海道第一の宿であるということから深いつながりがあります。

広重は、寛政九年（一七九七）に江戸八代洲河岸（千代田区丸の内）で、安藤源右衛門の子として生まれ、十五歳で画家歌川豊広の弟子となり、歌川広重の名を与えられました。始めは役者絵や武者絵などを描いていましたが、初めて風景画を発表したのは、天保二年（一八三一）のことです。

広重は、文化十三年（一八一六）の二十歳のときから、安政三年（一八五六）までの四十年間にわたって、細かく描き続けた写生帖と旅日記を残しています。

この広重に、大きな関心を寄せたのが、南品川にある常行寺の住職修多羅亮澄師です。師は、広重の残した記録、二十二巻百八十冊を収集して、境内に、「広重堂」を建てました。

広重の旅日記のなかから、品川にかかわるものの一部を紹介します。

「広重旅日記」抄録  
・天保元年九月二十一日（三十三歳）

品川宿に入ったのはまだお昼前だった。なじみの店に寄った。人々が行き来する道をながめながら酒を飲む。

旅が今日で終わりかと思うと、うれしいような、物足りないような気持ちになった。この店は、いつも客がいっぱいで、活気がある。酒も食べ物も良く、そのうえ値が安い。第一居心地がよく、腰をすえて楽しめる。

しばらくすると、天気が急に変わり、大粒の雨がポツリポツリと行き来する人の笠を打ちはじめた。そのうちに、「竜巻だ、竜巻だ。」と人々が騒ぎだす。あわてて外へ飛び出すと、沖合の二か所ばかりに、ひとすじの黒雲の中に火の気があってものすごい。雨は滝のように降りつけ、風も強く、道はまるで川のようだ。一時はこの先どうなることかと心配になったが、一時間ばかりたつと、またもとの良い天気になり、海もすっかり静かになった。

しばらくの間は、この話しでにぎやかだった。酔いがさめたのでもう一本飲んで、店を出てわが家に向かう。途中高輪（港区）で深川（江東区）の芸者千代に会う。久しぶりなので、立ち話をして別れた。  
　・天保八年九月二日（四十歳）

品川宿でのこと。昼の十二時ごろからくもり時々小雨になる。宿屋の蔦屋の前で見送りの人々と別れる。太兵衛さんから、せん別として三両戴く。夜中から本降りとなる。

・天保九年四月二十八日（四十一歳）

この宿屋は、いつも客が多い。東海道も、上り下りする旅人でにぎわっている。夕方になると宿屋の芸者たちが、きれいに化粧をして、客を呼び込む。

飲食店がずらりとならび、魚や貝は新鮮で味もよく、また、カニの料理は名物だ。お腹がすいたので、酒をたのむ。品川の景色は、見慣れているので、珍しくはないが、懐かしく、酒も食べ物も一段と味がよい。

江戸の町も目と鼻の先なので、心も落ちつき、楽しいおしゃべりをしている間に、酒を五本も飲んでしまう。こんなことは初めてだ。すつかり酔って何も覚えていない。

翌朝、宿屋の小部屋で目を覚ます。女中にたずねると、軒先に倒れていたので、気の毒に思って、主人の指図で泊めてくれたとのこと。大変申し訳なく思いながら、親切に感謝する。荷物など無くなった物はないかと調べたが、幸い何の被害もなかった。ただ、手足を少しすりむいた程度で、大したことはなかった。酒の酔いはまださめていないが、大失敗に苦笑いをしながら、旅の恥を書いておくことにした。　　― 　東海道写生旅行の帰り

・嘉永四年三月二十日（五十四歳）

品川宿についたので、顔なじみの居酒屋に入る。カニをつまみにして酒を飲む。のんびりとおしゃべりを楽しむ。久しぶりで主人が得意の料理を作ってくれる。女中のお松の愛想のいいお酌もいい。お礼に祝儀を出したので、残りのお金も少なくなってしまい、心細くなった。途中でそばを食べる。夜おそく家に着いた。　― 　富士百景写生旅行の帰り

・安政二年二月二十八日（五十八歳）

昨夜急に思い立って、京に旅立つ広信を品川宿まで送りに行くことにした。広信の家に行くと、みんながおどろいた。信太朗も来ていた。一緒に品川まで送ろうと行ったが、八ツ山で別れた。

品川の海は、いつ見ても気持ちがいい。しばらく茶店で休んで、風景を写生した。いつだったか、東海道々中の時に立ち寄ったことのある、浜屋の二階に上がり、海をながめながら、酒を飲む。まだ日が高かったので、品川の荒神様にお参りをする。今夜は宿屋に泊まり、写生を整理することにした。